

23 鍵の行方

星野博美

日曜日。夜、玄関で靴を脱いでいると、母が「今日はすごいことがあった」と興奮気味に言った。

母は毎日、夕方になると近所の公園へ行く。公園の片隅には鉄棒や台が備えつけてあり、高齢者が体操をできるようにになっている。買い物カートを引いて公園に行き、そこで猫おばさんと話をしたり、猫おじさん

に声をかけたりしながらひとしきり体操をし、そのあと商店街へ買い物に行くのが母の日課だ。

そんな母と一緒に家を出、公園で別れたのがほんの数時間前。その間に、とてつもないことが起きたらしい。

公園から帰ったあと、母は一念発起して台所と玄関界隈の片付けをしたそうだ。なんでも、前夜にテレビで見た「片づけのススメ」の類の番組に触発されたのだという。すると、もったいなくて捨てられない紙袋の山の中から、家の鍵を発見した。

それは、父が一週間前になくした鍵だった。

その時は、ちょっとした騒動になったのだった。「いったい、いくつ

鍵をなくせば気が済むのか」と母は父を責め、「たかが鍵一つくらい、どうってことないだろう」と父は防戦一方。

これまで働きづめに働き、自分で家を建てた父が鍵の一つや二つをなくしたところで、それほどの過失だろうか。責めたてられる父を見て不憫に思い、私は父の側についた。それが余計、母の怒りに油を注ぐことになった。

「たかが鍵って言うけどね、うちを改装した時に鍵は六個作ったのよ。で、娘たちに渡したから、残りは三個あるはずなの。なののうちには、もう鍵が一個もありません。明日からどうするの?」

「とりあえず、私のをあげるから」

キーホルダーから鍵を外して父に渡した。

翌日、父は私の鍵を持って武蔵小山商店街に出かけ、鍵屋で複製を頼んだ。すると、「このタイプは税抜き三千円になります」と言われ、びっくり仰天。驚きのあまり、複製は頼まず、鍵を取り返して帰ってきた。母の怒りには三千円分の根拠があったのだ。

とにかく父は、玄関の界限でよく物をなくしたり忘れたりする。

どこかへ出かけようとして靴を履きかけたところで、「あ、トイレを済ませておこう」と思い立つ。トイレへ行き、慌てて家を出る。鞆を忘れていく。

どこかへ出かけようとして、「寒いから手袋していこう」と思い、納戸へ手袋をとりに行く。靴を履いている最中に、「そうだ、トイレ」と思い出し、トイレへ行く。慌てて家を出る。玄関に手袋を忘れていく。

手袋をとりに戻る。すると電話が鳴る。慌てて電話に出る。電話を切つて、手袋を持ち、靴を履こうとしたところで、「マフラーもしていこうかな」と思い、再び納戸へ行く。マフラーをとろうとして手袋を「そこらへん」に置く。玄関に行く。手袋はどこへ行った！

そんなことが日常茶飯事なので、紙袋の山から鍵が発見されたことにも驚かなかつた。おそらく玄関で靴を履いている時、トイレに行こうとして、鍵を「そこらへん」に置き、そこから落下して紙袋の山の中に埋没したのだろう。

その鍵が一週間ぶりに出現したのだから、二人が喜ぶのも無理はない。私としては、鍵が見つかったことより、鍵が原因で家庭内に流れ始めた不穏な空気に終止符が打たれることのほうが嬉しかった。

「よかったね」と言っただけで階段を上がろうとすると、「それだけじゃないんだ。その一分後だよ」と母が続け、引き止めた。

その一分後。

母は、玄関の脇に置かれたスリッパ立てから黒い靴紐のようなものが垂れているのを見た。あれを踏んづけでもしたら自分か夫が転び、大腿骨骨折などの大惨事につながりかねない。母の周囲では、誰かが家の中で転んで大腿骨骨折をしたという報告が後を絶たない。八十を越えて長期の入院をすると、寝たきり生活に近づく確率がぐっと高まる。

「あれをどうにかしちやつて」と母は父に命じた。

父がスリッパを一つ一つ抜き出す作業にとりかかると、とあるスリッパの中から何かが転がり落ちた。

また、家の鍵だった。

それは父が「いつなくしたかも忘れた」くらい前になくし、しかし露見すると叱られるからひた隠しにし、なくしたことも内緒にしたことも、何もかも忘れていた鍵だった。

その様子も十分に想像できた。たぶん、いつものごとく突然トイレに行き、鍵をスリッパ立ての上に置いた。それがスリッパの中に落ちたに違いない。

「二分の間に、鍵が二つも出てきたんだ。これはすごいよ」と母。

それほどすごいことなのかどうか、私にはよくわからない。父が鍵を二つなくした。テレビ番組の影響でごちゃごちゃした玄関界隈を片づけた。結果として、鍵が出現した。それだけ。高齢者のいる家庭ではよく

あることだ。

しかし一日の終わりに「何もいいことがなかった」と思うより、「すごくいことがあった」と思えるほうが、ちよつぴり幸せだ。たとえそれが、傍から見たら大袈裟であったとしても。

「本当によかったね」と相槌を打ち、また階段を上ろうとした。

「あの靴紐は、神だよ」

母は興奮のあまり、そんなことまで言い出した。

そこで神を出すか。それは、いくらなんでもやりすぎというものだ。

「みだりに神の名を呼んではいけない。百歩譲って、片づけをするといいいことがあるという天の啓示ではないのかね」と消極的に同意し、本当に階段を上り始めた。数段上ったところで立ち止まる。

「で、その靴紐はどうなったの？」

「ん？ 捨てたよ」

階段の下から、「たったの一分よ」「本当に一分だったな」という声はまだ聞こえていた。私にはそれが、神の寿命のように聞こえた。

最後の鍵はどこにあるのか。それはきつと、しかるべき時に、また神が教えてくれるのだろう。